

## 第二章 源氏の女君たちの物語 新春の女君たちの生活

### [第一段 東の院の花散里]

\*年も返りぬ(年が明けてまた春になりました)。 \*注に<源氏三十二歳、紫の上二十四歳、明石の君二十三歳、姫君四歳となる。>とある。私は明石君を二十七歳と見ていて、5年前の出会いの時に、光君二十七歳、明石君二十二歳だったと考えている。当時の明石君は紫君と見比べられるよりは、楽器の腕前などで藤壺と比べられていた。藤壺はこの年で三十七歳、5年前は三十二歳だが、光君が藤壺と情交したのは、恐らくその10年前の光君十七歳、藤壺二十二歳の時だった筈だ。光君は紫君に藤壺の少女を求め、明石君に藤壺の女を求めた、ように思うので、明石君は紫君より年上だと考えたい。また、さらに注意して読み進むが。

うららかなる空に、思ふことなき御ありさまは、いとどめでたく(穏やかに晴れた空の下で満ち足りた二条院の御様子はますます華やいで)、磨き改めたる御よそひに(年末の大掃除で拭き磨き上げられて新春のお飾りがすがすがしく整えられた正殿に)、参り集ひたまふ\*める人の(年賀に参列為さいまする方の内で)、\*おとなしきほどの(七日、御よろこびなどしたまふ(六日の叙位で長官職に出世した者たちは、この七日に御礼挨拶などを為さいます。))、\*「めり」は一般的には<目にしていることの意味の推量>らしいが、此处では表事に対する女の語り手としての婉曲表現ということで、遠慮がちな言い換えを留意した。 \*「おとな」には<一族・集団の長や、年配で、主だった人。長(おさ)。頭(かしら)。女房の頭、武家の譜代の老臣、大小名の家老・宿老・年寄などの類。>の意があると大辞泉に説明されている。おそらくは<各司の長官>のことだろう。また「七日、御よろこび」について、注に<『集成』は「五日あるいは六日に、五位以上に位階が授けられる叙位の議があり、七日に位記が渡される。そのお礼言上である」と注す。>とあることから、「おとなしきほど」が<長官になった身分の者→長官に出世した者ども>と分かる。その者どもの御礼挨拶とは、正に内大臣の人事掌握権力者たる面目躍如である。

ひき連れたまへり。若やかなるは(新長官が引き連れなされた新次官たちは)、何ともなく心地よげに見えたまふ(光君に引き合わされて社交界の仲間入りを果たしたことに何ともなく高揚しているようです)。次々の人も、心のうちには思ふこともやあらむ(それ以下の人々は出世競争が激しいので色々と思惑はありそうですが)、うはべは誇りかに見ゆる、ころほひなりかし(取り敢えずは今の中央官僚の地位を誇って威儀を正しているといった光景で、御殿は当世の勢いそのままの様相を呈していました)。

東の院の\*対の御方も(東院の西の対の御方である花散里も)、ありさまは好ましく(身奇麗にしている)、あらまほしきさまに(品位を保った暮らしぶり)、さぶらふ人びと(仕える女房たちや)、童女の姿など(見習いの子供たちの姿勢も)、うちとけず(礼儀正しく)、心づかひしつづつ過ぐしたまふに(部屋の整理を行き届かせて過ごしていらしたので)、 \*「松風」巻の冒頭に「東の院造りたてて花散里と聞こえし移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて政所、家司など、あるべきさまにし置かせたまふ。」とあった。また、それに続いて「東の対は明石の御方と思しおきてたり。」とあって、光君の付けた女の序列が、紫君、明石君、花散里の順であることが分かる。そして新春の二条院の華やぎを描写した後に、東院の描写が此处に続いて光君の当時の人物像が立体的に表現される。

近き\*しるしはこよなくて(二条院の隣という近いことの利点も大いにあり)、\*のどかなる御暇の隙などには(穏やかな陽気の日中に公務も無く然したる懸案も無い時などには)、ふとはひ渡りなどしたまへど(殿がふらりと遣って御出でに成りましたが)、夜たち泊りなどやうに(夜の泊りがけなどには)、わざとは見えたまはず(少しもお見えに成りませんでした)。 \*「しるし」は<目印、標識>の他に<効果、御利益>ともある。 \*「のどかなるおんいとまのひま」は「ひま」をだらだと三重強調したわけではないだろう。「のどか」は<天気が温和>、「いとま」は<公務が無い>、「ひま」は<考え事が無い>。

ただ御心さまのおいらかにこめきて(それでも花散里は御気性が大らかな子供のままの世間知らずで)、「かばかりの宿世なりける身にこそあらめ(自分はこういう立場で暮らす運命の身の上なのだろう)」と思ひなしつつ(と考えることにして)、ありがたきまでうしろやすくのどかにもものしたまへば(ほかの誰にも無いほど邪念無く穏やかな物腰でいらしたので)、

をりふしの御心おきてなども(光君は季節毎に女たちに配分する物資の裁量に於いても)、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて(二条院の上に劣る違いを付けないように御方に与えなされたので)、

あなづりきこゆべうはあらねば(女房たちも軽んじ申す筈も無いので)、同じごと(上に対してと同じように)、人参り仕うまつりて(皆敬意を持ってお仕え致して)、\*別当どもも事おこたらず(警察官たちも院内見回りを怠らず)、なかなか乱れたるところなく(とても整然としていて)、目やすき御ありさまなり(東院は落ち着いた佇まいでした)。 \*「別当」が誰を指すのか不明。従って「事」も分からない。ところで、「別当(べつとう)」だけで最も特定される職掌は<検非違使庁の長官>らしい。「検非違使(けびゐし)」は京都の警官、取締官。で、何の根拠も無いが、例えば近衛を洒落で<別当>と呼んで院内警備に就かせる、なんてことも前の近衛大将にして内大臣たる光君なら出来てしまったりなんかするかも。で、そんなふうにしてみた。

## [第二段 源氏、大堰山荘訪問を思いつく]

山里のつれづれをも絶えず思しやれば(山里で姫を手放して寂しく暮らす明石君を絶えず気に掛けていらしたので)、公私もの騒がしきほど過ぐして(公私の正月行事が立て続く日々を終えてから)、渡りたまふとて(光君は大堰山荘にお出掛けなさろうとして)、常よりことにうち化粧じたまひて(いつもより念入りに飾り立てなさって)、\*桜の御直衣に(桜重ねの上着の下に)、えならぬ御衣ひき重ねて(上質の服を重ね着して)、たきしめ、装束きたまひて(香を焚き染めた身支度を為さって)、まかり申したまふさま(夫人にお出掛けの挨拶を為さる姿が)、隈なき夕日に(明るく差し込む夕日に)、いとどしくきよらに見えたまふを(いっそう映えて美しく見えなざるのを)、女君、ただならず見たてまつり送りましたまふ(夫人も素晴らしいと拝し申し御見送りなさいます)。 \*「桜の御直衣(さくらのおんなほし)」の「直衣」は貴族の礼服ではない普段着の「袍(ほう、上着)」だが、「桜」が柄なのか色なのか両方なのか分からない。ただ、今までの服装の描写はほとんど色合いの説明だったと思うので、此处でも色合いだろうと見当する。で、「袍」は参照写真などによれば経糸と緯糸の色の違いで模様を織り出す錦織物のようで、その糸の色が白と赤なら「桜がさね」という色合いらしいので、その辺を見当する。男物としては相当派手に思えるが、何しろ光君のことだから其れ位は着こなしただろう。

姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて(あどけなく光君の御袴の裾にまとわりついて)、慕ひきこえたまふほどに(御慕い申しなさるうちに)、\*外にも(とにも、妻戸から外にも)出でたまひぬべければ(出てしまい為さりそうだったので)、立ちとまりて(光君は戸口に立ち止まって)、いとあはれと思したり(姫をととても可愛く御思いになりました)。 \*「外」は「と」と読むらしい。で、訳文は<御簾の外>としてあるが、それは母屋から庇へ出ることを言っているのだろうか。寝殿の構造様式からすれば縁側の簀の子が柱の外側の板敷きで格子戸の内側が室内のはずだ。ただ、格子戸は出入り口ではないから妻戸口まで姫君が付いて来たのではないのだろうか。それの方が可愛らしく思うのは、考証不備だろうか。

\*こしらへおきて(光君は姫をなだめ付けてから)、「\*明日帰り来む」と、口ずさびて出でたまふに(催馬楽の一節を口ずさんで縁側へ出なされると)、渡殿の戸口に待ちかけて(玄關に向かう廊下の端に先回りさせた)、中将の君して聞こえたまへり(女房の中将の君から光君に夫人はこう申し上げさせなさいました)。 \*「こしらふ」は<用意する、装飾する>の「拵ふ」とは別に、<なだめる、取り繕う>の「慰ふ」があると古語辞典にある。 \*「あすかへりこむ」については、注に<催馬楽「桜人」の文句。「桜人その舟止め島つ田を十町作れる見て帰り来むやそよや明日帰り来むそよや言をこそ明日とも言はめ遠方に妻ざる夫は明日もさね来じやそよやさ明日もさね来じやそよや」>とある。Web サイト「今様ラプソディ」の催馬楽解説ページにこの歌の読みが記されていた。その読みを参考に少し遊びを試みる。で、先ず「そよや」は<そうだ、そうだ>くらいの囃子言葉らしく、それを省いて筋を見る。すると「さくらびと(尾張さくら地方の漁師さん)そのふねとどめ(あなたの舟を止めて)しまつたを(島あいの牡蠣の養殖いかだを)とまちつくれる(十反分作ってある所の)みてかへりこむや(様子を見て来るには)あすかへりこむ(一日で十分だろう)ことをこそあすともいはめ(そりゃ理屈じゃ一日で帰るとも言えるだろう)をちかたにつまざるせなは(向こうに妻を残して来た夫なら)あすもさねこじや(明日も共寝で先ず帰っては来ないだろうよ)」と読める。マア、牡蠣の養殖は当てずっぽうだが、「さね」が「実(本当に、くらいの強調)」と「さ寝(共寝)」の掛詞だから、繰り返しに味があるということなのだろう。催馬楽は酒の席の煽り歌が多そうだから、色に溺れる読みで大意は遠くないはずだ。ということは、「あすかへりこん(明日には帰る)」と口ずさんだ光君は<その心算だけど分からない>と途方けていた訳だ。

「舟とむる遠方人のなくはこそ、明日帰り来む夫と待ち見め」(和歌 19-05)

「向こうに妻がないなら、本気にしてもいいけれど」(意識 19-05)

\*この歌は練れていない。というか心意気だけで韻を踏んだ都々逸みたいな興趣物で、心情を詠んだ歌ではないのだろう。多分、光君は姫を宥めている時に「桜人」に因んだ、例えば此れから田んぼの様子を舟で見に行く、みたいな言い回しをしていた。その様子を見ていた夫人が、必ずや光君が調子に乗って「あすかへりこむ」を口ずさむことを予見して、中将の君を廊下の戸ばくちに「待ちかけ」させた、ということだろう。そして、チクリとたしなめた、と言うよりは合の手を入れて一興を共に楽しんだ、ワケだ。

いたう馴れて聞こゆれば(実に手馴れた受け答えを夫人が申したので)、いとにほひやかにほほ笑みて(光君も楽しそうに微笑んで、こう返歌為さいます)、

「行きて見て明日もさね来む、なかなか遠方人は心置くとも」(和歌 19-06)

「きっと明日には帰ります、ただのお遣いだけなので」(意識 19-06)

\*この歌の贈答、と言うより応酬だが、は催馬楽「桜人」を下敷きにした歌まね遊びだ。紫君の立場からすると「遠方人(をちかたびと)」は「姫を産んだ田腹の明石君」となって、「<そういう良い人がいるのだから桜人のように殿は明日帰って来ないでしょう>と皮肉った形。それに対して光君が言う「遠方人」は「<向こうの田原にいる人>という言い方で「姫の母君だから様子を伝えに行くだけ>と応えた事になって、「<先方がどんな気持ちでいても明日必ず帰ります>とその後凌ぎの受け狙いをしている。ただ場当たりの調子合わせとはいえ、光君は夫人に「<明日の帰宅>を約束する羽目にはなった。とはいえ、明石君が姫君の母親だから会いに行く、などという因果を反転させた言い訳を、紫君に言ってしまうと言う光君の厚かましき、ではあるが、この場面は、その全てが許される不条理を含む寿ぎの、雅なる情景描写なのかもしれない。

何事とも聞き分かで(実母の話とも分からず)\*されありきたまふ人を(じゃれ回りなさる姫を)、上はうつくしと見たまへば(夫人は可愛らしいと御思いに成って)、遠方人のめざましきも(山里の明石君の目障りなことも)、こよなく思しゆるされにたり(気になさらずお許しになりました)。\*「されありく」は「戯れ歩く」らしい。

「いかに思ひおこすらむ(母君の御方はこの姫君をどう思い遣っている事だろう)。われにて、いみじう恋しかりぬべきさまを(私でさえ、こんなに恋しくなってしまう可愛らしさなのに)」と(と夫人が)、うちまもりつつ(姫を見つめながら)、ふところに入れて(抱き寄せて)、うつくしげなる(愛しそうに)御乳を(おんちを、乳房を)\*くくめたまひつつ(口に含めさせるように指で口元に触れなさりながら)、戯れ(たはぶれ、楽しそうに)みたまへる御さま(座っていらっしゃる御姿には)、見どころ多かり(感じ入りさせられることがいろいろありました)。\*「くくむ」は「含む」で「<口に含む、包み込む>や「<口に含ませる、納得させる>。しかし、乳母でもなく、寝屋の間でもなかろうに、まして夏の薄着でもないものを、夫人が実際に乳房を姫に含ませたとは考えにくい。それに姫は数えて四歳、三月生まれだから満年齢でもほぼ三歳だ。やはり此処は真似事と見る他はない。夫人は小指を乳房に見立てて、姫の口元に触れて戯れた、ことにする。

御前なる人びとは(御側で使える女房たちは)、「などか、同じくは(どうせなら、御腹に儲けなさりたかったでしょうに)」「いでや(そうですよねえ)」など、語らひあへり(などと語り合っていました)。

[第三段 源氏、大堰山荘から嵯峨野の御堂、桂院に回る]

かしこには(山里にあつては)、いとどのどやかに(まことに穏やかに)、心ばせあるけはひに住みなして(しかし片付けの行き届いた暮らしぶり)、\*家のありさまも(この家なりの年始祝いの飾りや料理も)、やう離れめづらしきに(遣り方が違ってめづらしかったが)、みづからのけはひなどは(明石君自身の物腰などは)、見るたびごとに、やむごとなき人びとなどに劣るけぢめこよならず(中央貴女などに劣る違いはほとんど無く)、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく(見た目も気配りも望ましい成長ぶりです)。\*「いへのありさま」を「<建物様式>とする読みは奇怪しい。今更、それもこの年の初めに、特に山荘の造り方を話題にする前フリは何処にも無い。ざっと「<家の様子>」と言って置けば無難だが、話題の主旨は「<家々で違う年始飾りの仕方>」だろう。で、大堰荘のそれは京風ではなく明石風だった。が、明石君本人の方は次第に垢抜けして京風に劣らなかつた、という文構成。

「ただ、世の常のおぼえにかき紛れたらば(世間の普通の考えに従いさえすれば)、さるたぐひなくやはと思ふべきを(受領家の娘でも東院で他の女たちと共に暮らしても支障は無いと思うのだろうが)、世に似ぬひがものなる親の聞こえなどこそ(世にも稀な偏屈者である父親の強烈な劣等感こそが)、苦しけれ(困り物だ)。人のほどなどは(明石君の人となりは)、さてもあるべきを(貴人たるに十分に見えるのに)」など思す(などと光君は御思いに成ります)。

はつかに(わずか一晩では)、飽かぬほどにのみあればにや(とても十分な時間には足りないからでしょうか)、心のどかならず立ち帰りたまふも苦しくて(あわただしくお帰りなされるのもつまらないので)、「\*夢のわたりの浮橋か(東の間の慰めにでも)」とのみ、うち嘆かれて(ふと呟きなさって)、\*注に<「世の中は夢の渡りの浮橋かうち渡りつつものをこそ思へ」(奥入所引、出典未詳)を引歌とする。>とある。大意は<人生夢の如し、さればこそしかと物見よ>で、正にこの場面に相応しいものなのだろうが、こういうのは上手い言い回しをした者勝ちで、引歌も風情ある絵を想起させる出来映えだ。「浮橋」は実際に船に渡した踏み板ではあり、音から<憂き端>の情緒も漂わせ、「天の浮橋」の深遠さとそれが雲のように消える果敢無さまで表現する。その橋に想念を渡らせて、渡っている時に見える景色を総点検せよ、というのはある意味で情報処理の鑑たる格言にさえ思えるほどだ。浮橋を夢が通るのは必ずしも短時間とは言えないが、面白いのは重要な事案や懸案、または固執している思索などについては、情報整理の処理過程自体をログとして独立した別情報に保管する我々の思考方法ではある。

箏の琴のあるを引き寄せて(光君は部屋に出ていた十三弦を引き寄せて)、かの明石にて、\*小夜(さよ、風情ある夜が)更けたりし(過ぎて行った時の)音も(ねも、演奏の音も)、例の思し出でらるれば(いつものように思い出されなさったので)、\*「小夜」が何時の事なのかは、「音」が誰の演奏なのかに拠る。明石君の演奏「音」なら、光君の帰京直前に弾いた十三弦なので、この「小夜」は5年前の八月初旬の夜になる。明石君は、少なくとも正式には、その日に初めて琴の腕前を披露して光君を後悔させた。なぜ光君が後悔したかと言うと、明石君の楽器演奏の腕前は父君入道に聞かされていたにも関わらず、復帰が意外に早かったこともあって、出会ってからほぼ4ヶ月間を聞き逃してしまっていて、実際に聞くと、思った以上の腕前に感心したからだった。ところで、光君が明石君の楽器の腕前を入道から聞いたのは、かの三月の嵐を乗り越えて復権を予感しつつあった四月初めに、光君が京を思って弾いた七弦に入道が琵琶を合わせて、その際に入道が娘を光君に紹介しようと、明石君を琵琶の名手だと言ったことが始まりだった。そして光君は、明石君の琴はこの大堰山荘でも聞いたかもしれないが、琵琶はまだ聴いていないのかもしれない。とすると、「音」は入道の琵琶だったとも考えられる。いや、やはり「音」は明石君の琴で、入道の話思い出した、とした方が絵に成るか。

琵琶をわりなく責めたまへば(明石君に琵琶を是非にと責がみなさったので)、すこし掻き合はせたる(すこし爪弾いて合わせると)、「いかで、かうのみひき具しけむ(どうして、これほどまで上手に演奏出来るのだろう)」と思さる(と光君は感心なさいます)。

若君の御ことなど、こまやかに語りたまひつつおはす(聞では御方に詳しく話なさりながら過ごされます)。ここは、かかる所なれど(此処は町から離れた山荘ではあったが)、かやうに立ち泊りたまふ折々あれば(立ち寄ってお泊りになった朝は場合によって)、はかなき果物(この日のように簡単なお菓子や)、強飯(こはいひ、御飯)ばかりはきこしめす時もあり(くらはいは召し上がることもありました)。

近き御寺(ちかきみてら、光君はこの山荘通いの序でに近くの嵯峨野御堂や)、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ(桂院などにお出向きなさって誤魔化しながら)、いとまほには乱れたまはねど(あまりに正面切った女通い然とは為さらないが)、また(その一方では)、いとけぎやかにはしたなく(まことに麗々しい行列で外聞も憚らない)、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは(普通の相手のようにただ目立たないような忍びのお訪ねではない事などこそは)、いとおぼえことには見ゆめれ(誰の目にも明石君が特別な人と言う印象を与えたことでしょう)。

女も(明石君も)、かかる御心のほどを見知りきこえて(光君のこうした御配慮を承知申し上げて)、過ぎたりと思すばかりのことはし出でず(でしゃばらず)、また、いたく卑下せずなどして(引き過ぎず)、御心おきてにもて違ふことなく(お心積もりに違ふことなく)、いとめやすくぞありける(大変意に沿った状態でした)。

\*おぼろけに(一先ずは)\*やむごとなき所にてだに(“東院の貴女に於いてさえ)、かばかりもちとけたまふことなく(姫君に少しも気安くは接しなさらず)、気高き御もてなしを聞き置きたれば(礼儀を尽くしていなさる”ことを明石君は聞き知っていたので)、\*「おぼろけ」は古語辞典に<並大抵でないさま>とあり「おぼろけに」は<普通以上に>と程度を示すことになるが、「やむごとなき」も「うちとけたまふことなく」も「聞き置きたれば」もそれ自体では比較形容の意味を持ちえず、他に比較対照の標準値が文中はおろか前後文にも示されていないので、そうした程度比較の意味では文意が成立しない。そこで、此处は文意から逆推して「おぼろけに」を「聞き置きたれば」に掛かる修辞と考えると、成立する言い換えは<光君の説明を聞く限り一先ずは>となる。もう少し言えば<取り敢えず今のところは、当座は>という感じで、同一線上に<大雑把な印象では>とか<漠然と>とかも仄見えて、今で言う「おぼろげに」にも通じる気さえする。\*「やむごとなき所」は<東院の貴婦人>であることが、続く文の「近きほどに交じらひて」から限定されるが、<東院の貴婦人>とは事実上「花散里」だろうとは思ふ。しかし、東院の北の対の一角には日立宮姫も暮らしている。この君はやむごとなき王家筋ではあるが、ほぼ引き籠もり状態かと思われ、東院の正月風景にも描写されていない。それでも「やむごとなき所」という曖昧表現を「花散里」と言い切ってしまうには、躊躇せざるを得ない。なお、「うちとけたまふ」「御もてなし」の対象は「若君の御ことなど細やかに語る」場面であってみれば「若君」に他ならず、その主語である花散里に対する敬語表現も受領家筋の明石君の目線からの文体を示していることになるので、言い換え文のダブル・コーテーションを口語括弧で校訂すべき、とさえ考えられる。また、そうした方が文意も分かりやすい。更に言えば、桐壺院の女御の妹君が王家筋なのか、源平か、藤原氏か、大伴氏か、橘氏かは不明だが、実勢では明石入道の受領家のほうが勝っていて、言ってみれば「花散里」も「末摘花」も光君による没落貴族の救済にさえ見えるほどで、建前に価値を見出せない浅ましい現代人の目には、此处で使う敬語の意味自体も分かりにくいかもしれない。しかし、それは光君が今現在復権したことによる結果に過ぎない。何も光君は可哀相な女を救済しようと手を出したのではなく、あくまで奔放な愛欲、肉欲に身を委ねていたわけだ。出世したから光君は女たちを救済できたし、光君の価値観では救済すべき高貴な家柄の女たちでもあった。そして周囲は、出世した光君に縁のある王家筋の女だから敬った、ということになる。敢えて言えば、全ては宿縁なのであり、社会構造上の身分差は厳然と其処にある、というわけだ。いやしかし、その身分差によって形成された文化様式と切ない人生模様こそが実体に光と影を与えて、世情を華やかに彩っている。

「近きほどに交じらひては(私如きが東院に住んで貴女たちと交際してしまつては)、なかなかいと目馴れて(なまじ卑しい母親を見慣れて)、人\*あなづられなることどももぞあらまし(女房た

ちが姫を軽視し始めるような事にもなりかねない)。たまさかにて(寧ろ時たまに)、かやうに\*ふりはへたまへるこそ(このようにわざわざ光君が遠く足を伸ばし下さることこそ)、\*たけき心地すれ(その御堂参りの仰々しきで姫の尊厳が保たれるに違いない、と心強く思える)」と思ふべし(と考えるのでしょう)。 \*「あなづられ」の「られ」が受身だとすると、主語は「人」ではなく「姫君」ということになるので敬語が無いのは奇怪しい。で、此処の「られ」の主語は「人」ということになるので、文法上は自発を表す助動詞「らる」の連用形で「なること」に繋がる。 \*「ふりはふ」は<遠く足を伸ばす→わざわざ~する>と古語辞典にある。 \*「たけき心地すれ」は<誇らしく思えるものだ>のようにも見えるが、「たけし」は<勢いがある>だから<姫の優位性>とも解せ、「心地」は<心理状態>だから<優位性の保持>とも解せ、「すれ」は「こそ」を受けた推量の言い切りで、文脈を汲めば<姫の尊厳が保たれるに違いない>の方が意味は通りやすい、としたが少し拡大解釈気味だろうか。

明石にも(明石の入道にも一連の動向は知らされていて)、\*さこそ言ひしか(自分も祝って遣りたかったと)、この御心おきて(姫を二条院へ移すという光君の御判断と)、ありさまをゆかしがりて(袴儀の祝儀の様子が気になって)、おぼつかながら(詳しい事情を知ろうと)、人は通はしつつ(入道からも大堰に使者を通わせてはその報告に)、胸つぶるることもあり(心配もし)、また(時には)、おもだたく(名誉にも感じて)、うれしと思ふことも多くなむありける(嬉しく思う事も沢山あったようでした)。 \*「さこそ言ひしか」は年末の大堰の描写にもあったが、<そう言って遣れたなら、どんなに良かったらう>の意から<自分も祝って遣りたかった>の定型句と考える。